



2008年11月5日

日本応用心理学会ニュースレター

——コミュニケーションの広場——

No. 20

1. 日本応用心理学会第75回大会を終えて

大会委員長 藤森 立男

日本応用心理学会第75回大会は、去る平成20年9月14日(日)～15日(月)、横浜国立大学を会場として開催いたしました。幸いなことに、大型台風の直撃を受けることなく、2日間の大会を大過なく終了することができました。本大会の運営には、研究発表者や参加者の方々のご協力や大会関係者の準備段階からの地道な努力等による貢献がありました。また、出版社等の貴重なご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

本大会の概要をご説明いたします。大会参加者総数は289名であり、内訳は一般正会員181名、院生正会員47名、一般非会員30名、院生非会員19名、

その他12名でした。本大会でも、院生の参加者は66名であり、前大会からスタートした若手研究者支援の取り組みが着実な成果をもたらしているものと考えております。大会企画の特別講演2件、シンポジウム1件、ワークショップ2件、学会企画の研修会2件に加え、自主企画のワークショップ4件、口頭発表34件、ポスター発表79件の発表申し込みがあり、滞りなく当日の発表がなされております。

本大会では、メインテーマを「安寧と安全の心理学」とさせていただきます。近年、大地震やそれに伴う津波、ウラン加工臨界事故、電車脱線事故

目次

1. 2008年度大会第75回大会を終えて藤森立男・大会委員長 (横浜国立大学)からのご挨拶	1	5. 国際学会開催のお知らせ ...蓮花一己・国際交流委員長(帝塚山大学)	7
2. 研究発表した大学院生の声 ①(大学院・修士課程)横浜国立大学大学院・ 修士課程学生・田中健太さん	3	6. ICTTP2008(米国ワシントンDC)への参加 報告.....松浦常夫・広報委員(実践女子大学)	8
②(大学院・博士課程)立正大学大学院・ 博士課程学生・松原詩緒さん	3	7. 名誉会員の推戴大橋信夫・新名誉会員からのご挨拶	8
3. 学会賞受賞について (1)学会賞選考委員会から(荻野七重・委員長)...	4	8. 2009年大会開催校からのご挨拶川本利恵子・大会委員長(九州大学)	10
(2)受賞者の声 ・論文賞部門受賞者.....中井 宏さん (大阪大学大学院人間科学研究科・ 博士後期課程、日本学術振興会特別研究員)	4	9. 「応用心理士」認定審査委員会からのお知らせ浮谷秀一・委員長(東京富士大学)	10
・実践報告部門受賞者.....長崎純子さん (河合義根・可根記念福祉会 児童デイサービス和施設長)	5	10. 終身会員について浮谷秀一・事務局長(東京富士大学)	11
4. 企画委員会報告と2008年度公開シンポジウム のお知らせ.....内藤哲雄・企画委員長(信州大学)	6	11. 役員選挙について浮谷秀一・選挙管理委員長 (東京富士大学)	11
		12. 事務局だより浮谷秀一・事務局長(東京富士大学)	11
		編集後記.....所 正文・広報委員長(国土館大学)	12



等、自然災害や産業災害が立て続けに起こっています。こうした災害は一生かけて築きあげた財産や多数の尊い生命を奪い去ります。これらの事象は個人や社会にトラウマを残し、組織の社会的評判を失墜させる等、人々が抱えている安心や信頼に対しても大きな悪影響を及ぼします。本大会では、こうした環境の中で生活する個人の安寧や健康の向上に資することを目的としたシンポジウム、ワークショップ、特別講演等を企画いたしました。特別講演として、東京大学の村上陽一郎特任教授をお招きし、安全学の源と展開についてご見解をうかがいました。学習院大学の永田良昭名誉教授には「人と社会の関係態の古くて新しいストーリー」についてご講演いただき、心理学が政策科学の一翼を担うための具体的方策についてご提案いただきました。シンポジウムでは、横浜国立大学の佐土原聡教授から“Geographic Information System”についてご解説いただき、地理情報システムを活用した応用心理学研究の可能性について重要なヒントをいただきました。ワークショップは、東京大学の畑村洋太郎名誉教授から「失敗知識データベースの活用法」について、お茶の水女子大学の箕浦康子名誉教授には「フィールドワークのミニ実習：構築主義的心理学への誘

い」について実践的なご指導をいただきました。

学会企画の研修会として、白梅学園短期大学の林潔名誉教授には「生活のなかの認知行動療法」をご講義いただき、認知行動療法を理解するための基礎についてご解説いただきました。また、山梨県立大学の松下由美子教授からは「応用心理学分野における看護学研究の発展のために」というテーマで、看護学研究で取り扱われている代表的な研究手法や考え方についてご紹介いただきました。この研修会では、看護学研究の重要性が強調され、「新たな学会の胎動を予感させる熱い議論が交わされた」との感想が参加者から寄せられております。

本大会の発表論文集やプログラムの表紙には、幕末の絵師「歌川広重」が横浜港を描いた錦絵を掲載させていただきました。世界に開かれた学会として、生きのよい若い研究者をどしどし受け入れるとともに、人生経験豊かな先生方の見識を活かしながら、力強く前進していく日本応用心理学会のイメージと願いを込めて制作いたしました。横浜開港資料館のご好意により掲載が許可されており、大変ありがたいことと感謝いたしております。

懇親会は、異国情緒あふれる横浜中華街の重慶飯店（別館）を会場に開催いたしました。前大会から

始まった同伴者の参加申し込みが複数あり、アットホームな雰囲気の家となりました。特別に、名誉会員の先生方にはご登壇いただき、含蓄あるお言葉をいただきました。また、新たに名誉会員になられた大橋信夫先生にもご挨拶をいただきました。中締め前には、次期大会委員長の川本利恵子教授（九州大学）によるご挨拶があり、越河六郎先生からは共編「労働の生産性第2部（労働科学研究所出版部）」についてご紹介いただきました。短い時間でしたが、中国四大料理のひとつである四川料理をご堪能いた

だきながら、親睦の場としてお役に立てたことを嬉しく思っております。

最後になりますが、本大会の開催にあたり、前大会委員長の蓮花一己先生（帝塚山大学教授）から有益な助言をいただきました。このことは大会運営の大きな助けとなりました。同時に、多くの方々に支えられていることを改めて実感した貴重な機会となりました。皆様のご協力に、心から感謝申し上げます。

（横浜国立大学大学院国際社会科学研究所教授）

2. 研究発表した大学院生の声

(1) 横浜国立大学大学院・博士課程前期・田中健太さん

このたび、初めて日本応用心理学会に参加させていただき、口頭発表をさせていただきました。発表は大会初日の「社会・文化」のセッションで、しかも自分の発表はセッションのなかで、一番始めの発表でした。そのため、非常に緊張しつつ、自分の発表に不安を抱えながら発表させていただきました。

大学の学部時代の勉強と心理学との関係があまりなかったのですが、大学院から心理学的な実験を始めていました。そうしたなかで私の所属する横浜国立大学で大会が開催されるとのことで、指導教授の勧めもあり、参加させていただきました。

初めての心理学会でどのように要旨、発表の準備をしているのか全くわからず、今回の大会会長である藤森先生に助言をいただき試行錯誤しながら、準備させていただいていたことが記憶に強く残っております。

今回の発表ではまだ分析途中で、統計分析もあわてて行っていたために、自分としては十分な考察ができていないと感じ、発表が不安でした。しかし会場の先生方があまり自分の研究とは結びつかないともかかわらずに、熱心に聴いてくださり、本当に発表のしやすい雰囲気でした。

また、自分の参加したセッションや、他のセッション、特別講演など、普段は聞けない研究についての話を聞くことができました。大学で勉強することも重要ですが、実際に研究を行うとなるとどのような手法で、得られたデータをどのように分析するかなど、細かい研究の段階などは学ぶ機会がほとんどありません。そうしたなかで、こうした学会に参加することで、自分が今後いろいろな研究を試みる

際に非常に参考になることだと改めて感じました。また他の先生方の発表を聞き、自分ももっとしっかりした研究発表をしないと、今後の励みにもなりました。

こうした発表の機会を今回の日本応用心理学会でいただけたことにとっても感謝をしております。そして最後に本大会の大会会長であり、多くの助言をいただいた藤森先生をはじめ、大会運営を支えていただいた関係者の方々に感謝の意を表させていただきます。本当にありがとうございました。

(2) 立正大学大学院・博士課程・松原詩緒さん

第75回大会では社会・文化のジャンルで、日米の自己開示と充実感・ふれあい恐怖の関係についてポスター発表をさせていただきました。

研究を黙々と進めていると、いつの間にか視野が狭くなり、偏った思い込みに捕らわれることがあります。しかし“発表”という目的を持つことで、自分以外の誰かに伝えるためにまとめ直し、研究を外から見直すことができました。そして当日の発表では、先生方からのご指導をいただくことでさらに視野が広がり、見落としていた分析の注意点や、新しい視点からの切り口に気づかされました。応用心理学会での発表は初めてだったため、緊張もあり、思うようにできなかった点多々ありました。それでも丁寧にご指摘・ご指導くださった先生方には心から感謝をしております。ありがとうございました。今後、ご指摘を踏まえ、さらなる研究に励みたいと存じます。

また、開催されたワークショップや口頭発表は興味深く、同じ時間に行われていたためにどれを拝見しようか悩みました。特に、血液型のワークショッ

プは興味を持って聞かせていただきました。ここ最近、世間では血液型による性格判断が再び取り上げられており、人気図書として本屋の平棚にも並んでいます。血液型と性格に対する注目度は高く、googleで「古川竹二」と検索すると、5,000件近くものヒットが出るほどです(2008年10月現在)。ここで改めて、心理学的見地から血液型と性格の関連について意見を述べ合うというコンセプトに心ひかれました。また同じテーマに沿っての、先生方の

特徴あるご意見・ご発表はとても刺激的でした。質疑応答を聴講するのもまた勉強になり、分野の違う発表も興味を持って聞かせていただきました。

学会は、研究に対する刺激を受けたり、他大学・機関の研究者とコミュニケーションを取ることのできる貴重なチャンスです。本大会でも、とてもよい刺激を受けました。頑張る力をいただいたと思います。これをバネに、くじけず前進したいと考えています。

3. 学会賞受賞について

(1) 学会賞選考委員会から

学会賞選考委員長: 荻野七重(白梅学園短期大学)

日本応用心理学会に学会賞が設けられ、第1回の授賞式が行われたのは、第65回大会(1998年龍谷大学)のときのことでした。それからの10年間に、学会賞を9名、奨励賞を8名の方が受賞されました。しかしご存知のとおり、学会賞、奨励賞の選考が思うように運ばず、学会賞、奨励賞ともに該当者のいない年が続くようになり、学会賞規程を変更するに至りました。昨年度の第73回大会(2006年文京学院大学)の総会では、そのため、両賞とも該当者がいないことをご報告する一方、新しい規程の作成を検討中であり、そのご了承を会員の皆様にお願ひしました。

こうして、新規規程が2007年2月に施行されるに至りました。新規規程につきましては、ニューズレター等を通じて、ご紹介したとおりです。理事の推薦とそれに基づく選考委員会による第1次選考、その結果を踏まえた常任理事会による第2次選考という方法には大きな変更はありません。しかし新しい規程では、これまでの奨励賞が廃止され、学会賞を論文部門と実践活動部門の二部門について設けることになりました。また、選考は隔年で行うことになりました。昨年の74回大会(2007年帝塚山大学)で学会賞の表彰が行われなかったのは、このような事情によるものです。

2008年度は、新しい規程による初めての学会賞の選考が行われる年に当たりました。学会賞の論文部門は、本学会機関誌『応用心理学研究』所載の論文を対象とし、実践活動部門は、応用心理学の知見を生かした社会的実践活動を行っている会員を対象とするという規程です。今回の論文部門は、「応用心理学研究」のVol. 31-No. 2、Vol. 32-No. 1、Vol.

32-No. 2、Vol. 33-No. 1の論文が選考の対象となりました。

本年度、論文部門および実践活動部門の学会賞を受賞された方は次のとおりです。

・論文部門

(原著) 運転場面におけるリスクテイキング行動の一貫性検証

「応用心理学研究」Vol. 32-No. 1

中井 宏氏(大阪大学大学院人間科学研究科)

臼井伸之介氏(大阪大学大学院人間科学研究科)

・実践活動部門

乳幼児への総合的発達相談活動の実践

長崎純子氏(児童デイサービス「和(なかよし)」施設長京都発達研究会)

論文部門の「運転場面におけるリスクテイキング行動の一貫性検証」は、リスクテイキングというテーマは新しくはないが、個人内一貫性を取り上げ、新しい検証法を採用し、心的要因と外的要因を細かく検討していること、その手法の的確さ、知見の信憑性が評価されました。

実践活動部門の長崎純子氏は、応用心理学の基礎研究をもとに、それらの成果を社会的な保育・教育・療育の実践現場に生かしていく実践的な相談活動を積極的に展開してきたこと、特に、乳幼児発達相談への長期にわたる継続的取り組みにおいて、その中心的な役割を果たし、貴重な成果を上げてきたことが評価されました。

(2) 受賞者の声

【論文賞部門受賞者】中井 宏さん

大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程、
日本学術振興会特別研究員

このたびは、「応用心理学研究」という歴史ある雑

誌に拙稿が掲載されただけでも喜んでいたところ、正に青天の霹靂といえますか、このような名誉ある賞を頂戴し、身に余る光栄と存じます。荻野七重選考委員長ならびに選考委員会の先生方には、心よりお礼申し上げます。また、有益なコメントをいただいた匿名査読者の先生方、研究初期段階から建設的なアドバイスをくださった研究仲間、さらには実際の調査にご尽力いただいた方々にも深謝いたします。

小生どもの論文では、題目のとおり、自動車運転場面におけるリスクテイキング行動（危険を認識していながらあえてその行動を行うこと）の一貫性について、約1,400台を対象とした観察調査から検討いたしました。結果を概説いたしますと、各行動指標間（例えばシートベルト着用の有無、速度、確認など）の一貫性と各指標内での複数日にわたる一貫性が認められ、ある場面でリスクな行動をするドライバーは他の場面でもやはりリスクに振舞うことが示されました。今後は、この一貫性を規定する個人内要因に注目し、社会全体の交通安全に寄与することのできるさらなる“応用”研究を進めて参りたいと存じます。

最後に、歴代の受賞者を改めて眺めると、錚々たるお名前が並んでおり、小生の名が加わることに違和感を覚える方も多いかと存じます。先達の方々のケースでは、応用心理学会への多大なるご貢献が認められてのものでございますが、今回から学会賞の選考基準等も変わり、おそらく手前どもの場合には「受賞の栄誉に恥じぬよう、もっと精進を重ねるように」とのメッセージが込められた賞だと解釈しております。歴代の受賞者に少しでも近づけるよう日々研鑽を積んで参りますので、皆様方には倍旧のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

【実践報告部門受賞者】長崎純子さん

河合義根・可根記念福祉会・和（なかよし）・
京都発達研究会・施設長

このたび、私たちの活動が実践報告部門で学会賞を受賞させていただきまして、大変嬉しく

思っております。長年にわたり共に取り組んできた京都発達研究会のメンバー、そして、活動開始当初より指導していただいた京都大学の田中真介先生には、深く感謝しております。

本活動は、自治体や療育現場の発達相談員（心理職）ら、また、発達心理学・教育学・保育学を専攻する大学院生がチームをつくり、京都市内の民間保育園2園の1歳児クラスと4歳児クラスの幼児を対象に発達相談を行うものです。2001年度から開始され、今年で8年目になります。年間およそ80名、延べ700名近い子どもたちと、その保護者、保育園の担任らとの発達相談を実施してきました。

従来、発達相談は「保護者と子ども」を対象に行われ、巡回相談などの障害児保育支援は「保育士と子ども」を対象に行われ、目的に応じて相談するという形態が中心でした。しかし、目的や対象を限定することにより、時には保護者と保育士が対立的な関係に陥ってしまったり、発達相談で得られた子どもの課題が共有されず子育て・保育で生かされないことがあります。さらに、保護者の抵抗感も否めません。個別に発達相談を受けるということは子どもに発達の遅れや問題があることを示唆されることであり、受診そのものを拒否することもあります。

そのため私たちの研究会では、育児不安や就学不安の高まる年齢に焦点を絞りクラスの全数を対象とすること、発達相談には保護者が同席し障害や保育困難を示す子どもには保育士も同席すること、検査結果では指数算出せず現在の発達の特徴を踏まえた上での育児・保育の課題を提示すること、全職員を対象とした報告会を行うことなどを原則として発達相談を行いました。「保護者-保育士-発達相談員」が連携することにより、多面的な「子育て支援」「障害児保育支援」として、これまでにない新たな発達相談活動を構築することができたと思っております。

今後は、これまでの活動の蓄積を分析し、発達研究・保育研究・療育研究等を進めるべく努力していきたいと思っております。ありがとうございました。

4. 企画委員会報告と 2008 年度公開シンポジウムのお知らせ

企画委員長：内藤 哲雄（信州大学）

企画委員会により毎年度の大会時に研修が実施されます。本年 9 月 14・15 日に開催された第 75 回大会（横浜国立大学）では、研修会 A：[講師] 林 潔（白梅学園短期大学名誉教授）/[司会] 井上孝代（明治学院大学）「生活のなかの認知行動療法」と、研修会 B：[講師] 松下由美子先生（山梨県立大学教授）/川本利恵子（九州大学）「応用心理学分野における看護学研究の発展のために」の二つが実施されました。いずれも講義室いっぱいの参加者で、年齢幅は名誉会員から大学院生まで広く分布しており、熱気にあふれていました。講師と司会の先生方、参加された会員諸氏にお礼申し上げます。

もう一つの委員会の主要業務は、公開シンポジウムの開催です。初めてのことで、地方開催となります。会場は長野県松本市にある信州大学人文学部で、信州産学官連携機構の後援、信州大学人文学部、長野大学社会福祉学部、松本大学総合経営学部の共催で、「地域の高齢化と再活性化」をテーマとして開催します。現在、地方の農山村では人口の過半数が 65 歳以上である「限界集落」がいくつも見られます。限界集落を超えると「超限界集落」から「消滅集落」へと向かうとされています。過半数が 55 歳以上の集落は「準限界集落」と呼ばれています。実は、限界集落ほどではないのですが、大都市でも 65 歳以上の人口が 30%を超える地域が少なからず存在しています。例えば、東京の多摩ニュータウンや高島平がそうです。農山村に限らず都市部でも存在する高齢化の偏りと地域の衰退、再活性化の問題について、地域の現場を掘り下げることで普遍的な問題や対策について論議します。地元や周辺地方に限らず、多数の参加を期待しています。

日本応用心理学会公開シンポジウム：地域の高齢化と再活性化

日 時：2008 年 12 月 14 日（日）午後 1 時～

午後 4 時
会 場：信州大学人文学部 会議室（人文学部・経済学部共通棟 6 階）
※松本駅東口前のバスセンターから、信大西門前までのバスが便利です。信州大学のホームページ参照。
企 画：内藤哲雄（信州大学人文学部教授・応用心理学会常任理事）
司 会：向井希宏（中京大学心理学部教授・応用心理学会常任理事）
：中嶋聞多（信州大学人文学部教授・信州大学産学官連携推進本部-地域ブランド部門長）
話題提供者：内藤哲雄（信州大学人文学部教授・応用心理学会常任理事）
・農山村地域と都市部における高齢化問題について
：清水健司（信州大学人文学部講師）
・老人介護について（施設における臨床事例を中心に）
：栗田明良（長野大学社会福祉学部教授）
・介護移住、地域密着型サービスの展開について
指定討論者：尻無浜博幸（松本大学総合経営学部准教授）
：大橋信夫（日本福祉大学名誉教授・労働科学研究所・応用心理学会常任理事）
：林 靖人（信州大学産学官連携推進本部-地域ブランド部門研究員）
主 催：日本応用心理学会
共 催：信州大学人文学部、長野大学社会福祉学部、松本大学総合経営学部
後 援：信州産学官連携機構（SIS）

5. 国際学会開催のお知らせ

国際交流委員長：蓮花 一己（帝塚山大学）

(1) 第27回国際応用心理学会の案内

横浜国立大学での日本応用心理学会第75回大会でお知らせしたように、第27回国際応用心理学会 (International Congress of Applied Psychology) がオーストラリア・メルボルンにて開催されます。会員の皆様の積極的な参加をお願い申し上げます。

学 会：27th International Congress of Applied Psychology

開 催 地：オーストラリア・メルボルン
メルボルン会議センター (Melbourne Convention Centre)

会 期：2010年7月11日～16日

学会サイト：www.icap2010.com

国際応用心理学会は世界でもっとも歴史のある国際的な心理学会の一つであり、設立が1920年、会員が80カ国以上から1,500名を数えています。その中には17の部門があり、部門ごとの活動も活発に行われています。部門には、産業心理学、環境心理学、教育・学校心理学、健康心理学、環境心理学、スポーツ心理学、交通心理学、臨床・コミュニティ心理学、カウンセリング心理学など日本応用心理学会とも関係の深い領域が並んでいます。学会参加や発表は国際応用心理学会の会員でなくてもできますが、これを機会に、会員になっていただき、各部門での日本人の発表や活動を積極的に行っていただければ幸いです。

国際交流委員会では、同学会メルボルン大会の開催要項と研究発表等の募集案内 (announcement and call for papers) を学会事務局から入手しました。同パンフレットの入手を希望される方は、返信用定型封筒（住所、氏名を明記の上、80円切手を貼付）を同封して、学会事務局にご請求ください。

研究発表等の申し込み期限は次のとおりです。詳しくは上記の案内に記載されています。（これらの期限は主催者側の都合で変更されることがあります。必ず学会サイトでのご確認をお願いいたします。）

申し込み受付開始 2009年1月1日

申し込み受付締め切り 2009年12月1日
発表者への受理通知 2010年2月1日
予約割引申し込み期限 2010年3月1日

(2) メルボルン大会への本学会企画シンポジウムの提案について

本学会では過去のICAP同様、次回メルボルン大会においても Invited Symposium を企画しております。委員会で検討を重ね、総会で提案したとおり、シンポジウムのテーマを Measures to aging in Japan（日本の高齢社会への対応）としました。

日本の高齢化の進展は先進諸国の中でも早くかつ急激であり、そのため、多くの社会問題が生じていると同時に、その解決のための議論や対策の実施も数多くなされています。また、日本応用心理学会の各分野で研究が活発に進められているテーマでもあります。そこで、福祉、交通、社会、医療・看護という各領域からの発表者を設定することで、国際的な関心が得られると考えた次第です。なお、本シンポジウムのまとめ役 (Convenor) は国際交流委員長の蓮花が務める予定です。今後は、国際交流委員会で学会の会員からの推薦や情報提供を受けて人選を進めて、具体的な取りまとめを行います。

(3) 国際交通・運輸心理学会の日本への誘致活動

2012年に開催される第5回国際交通・運輸心理学会を日本で開催することが検討されています。次回候補地については運営委員会で議論されている段階でまだ決定されている訳ではありませんが、日本交通心理学会では今年（2008年）9月にワシントンで開催された第4回学会で提案を行ったということです。正式に決定されれば日本応用心理学会としても協力できる部分があると考えており、国際交流委員会でその内容について検討を進める予定です。

他の会員の皆様で国際会議等を日本で開催することを準備されている場合には、学会事務局あるいは国際交流委員会までご連絡をお願いいたします。

6. ICTTP2008 (米国ワシントン DC) への参加報告

広報委員：松浦 常夫 (実践女子大学)

8月の末から9月はじめにかけての4日間、ワシントンで開催されたICTTPに参加したので報告します。ICTTPはInternational Conference on Traffic & Transport Psychologyの略称で、4年に一度開催され、スペインのバレンシア、スイスのベルン、イギリスのノッティンガムに続き今年が4回目の若い会議です。1990年の京都大会を期に結成されたICAP(国際応用心理学会議)の13部門がその母体です。

交通心理学に関する最も規模の大きい国際会議で、今回は337名の参加者がありました。日本からの今回の参加者数は10名ちょっとで、応用心理学会員からは6名の発表しかなく、少しさびしい気がしました。大会の発表はヒルトンホテルの2階を使用して、四つの小会場と一つのメイン会場で行われました。主なテーマは交通心理学全般にわたり、以下のようなものがありました。

群別の運転者(高齢運転者の機能低下、高齢運転者と免許、高齢運転者の運転行動、若者運転者、職業運転者)、車以外の交通参加者(歩行者、自動二輪・原付・自転車)、運転者属性(経験、性差、文化差)、運転者の心理要因(パーソナリティ、社会要因)、運転者の情報処理(視覚、リスク知覚、認知とリスク、知覚、注意)、運転行動(違反者、運転課題、速度、飲酒運転、疲労、シートベルト)、運転の人間工学(運転者支援システム、シミュレーション)、運転行政(政策、取り締まり)、交通安全教育(運転者教育と免許、学校と保護者)、交通体系(モビリティ、交通モード)。今回の特徴は高齢者関係の発表



が多いことで、私の発表もその関連のものでした。

余談ですが、ワシントン滞在中はメキシコ湾からのハリケーンがルイジアナ州のニューオーリンズに上陸のニュースと、共和党の大統領候補の指名投票でジョン・マケインが正式に候補となり、副大統領候補に44歳の女性アラスカ州知事のサラ・ペイリンが指名されたニュースでもち切りでした。イチローの8年連続200本安打挑戦のニュースは日本ほどではなかったのですが、せめてワシントンに本拠を置く大リーグ(ワシントンナショナルズ)の試合でも見ようと、3人でホテルから30分ほどのところにある球場まで出かけました(写真 Washington Nationals vs. Philadelphia Phillies)。

4年後のICTTP5は、日本で開催される可能性があります。正式には来年の早々に決定されますが、その時には日本応用心理学会からのご援助と会員の皆様の発表をお願いいたします。

7. 名誉会員の推戴

このたび名誉会員になられた大橋信夫先生からご挨拶をいただきます。

このたびは私のような者を名誉会員にしてくださいと誠実に有難うございました。

恩師のお一人で海上労働研究の開拓者である故西部徹一先生が本会の名誉会員になられたお祝いを申し述べたのはもう30年近く前になろうかと思えます。西部先生をはじめとして私を導いてくださった

諸先生が何人も名誉会員のなかにいらっしゃいます。そういう先生方の列に連なってもよいのだろうかと思つても強くなりますが、それとともに大変に嬉しく有り難く思っております。

まだ20歳代だった私が自分



のやっていることの意味が分からなくなって相談にのっていただいた西部先生からこんな主旨のお言葉をいただきました。「研究者に必要なものは、『鈍』と『根』と『運』だ。こんなことをやっていると何の意味があるか、なんて考えてはいけない。頭が良いと変に先を見ようとし、しかも見えたと思いつむ。そうでなければ見えないと悩む。だから『鈍』じゃないといけないんだ」、「それから手をつけていることをとにかく続ける『根』が必要だ。そうして最後は『運』だ。たまたま貴重なデータを手にすることだってそうだし、研究の成果を世に問うたときに、たまたまちゃんと評価してくれる人がその場に居た、というような『運』がモノをいう世界だ。『運』は努力でなんとかなるものではないが、『鈍』、『根』なくしては決して巡ってはこない。これを忘れるなよ」このお言葉はその後の私をずっと支えてくれたもので、最近「労働の科学」で詳細を紹介させていただきました。「根」があったかどうかはあまり自信がありませんが、間違いなく「鈍」であった私は、本当に「運」に恵まれたとつくづく感謝しているところです。

故桐原葆見先生が1946年に「労働と科学」第一巻、第三号にお書きになった理論と應用と題するお考えにもたくさんの勇気と自信をいただきました。その一部をご紹介します。

「理論があって、しかる後にそれを實際の事がらへあてはめて處理するのが應用である、といふことにまちがひはない。けれども考察の過程の現實は正にその逆である。應用が前で、理論は後から引き出されるのである。(中略)

理論がまずあって、しかる後に應用、と來るから、その應用が甚だ幅のせまい、融通のきかない、へん狭な應用になってしまう。(中略)

科學的といふことが、若しいかめしい科學の原理を先ず大上段にふりかざして行くことでなければならぬやうに考へられたなら、それは却って非科學的となるおそれがある。こんな迷信は捨てて、ひたすらに現實の事象を順序正しく觀て行かうではないか」

海上労働に取り組むにせよ、過疎山村の独居高齢者の生活に取り組むにせよ、現實の事象を觀察し記述することを進めてこられたのは、桐原先生のこの一文のお蔭です。こういうお考えに若いうちに出会

えたことも私の運の一つでした。

現在は労研に毎週一度通って、数々の乗船調査で撮り貯めた船員の働く姿、生活する様子の写真のデジタル化を進めています。アルバムからはがしパソコンに取り込み、タイトルをつけ、またアルバムに戻すという、またまた「鈍」と「根」を必要とする作業です。計算すると欠かさずに毎週通っても2年半はかかりそうです。少なくともその間は元気でいたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

【大橋信夫先生の主な経歴と業績】

〈主な経歴〉

1938年2月3日生まれ(70歳)

1960年 東京商船大学(現東京海洋大学)商船学部卒業

1960年 運輸省(現国土交通省)航海訓練所・運輸教官(至1966年)

1966年 (財)海上労働科学研究所(至1988年)

1976年 第6回桐原賞受賞

1988年 長野県短期大学・教授(至2001年)

2001年 日本福祉大学・情報社会科学部・教授(至2008年)大学院心理臨床研究科・教授

2002年 博士(心理学・中京大学)

現在、(財)労働科学研究所・客員研究員、日本応用心理学会常任理事

〈主な研究業績〉

1. Psychological Aspects of Work Load on Board, H. Goethe et al. 編, Handbook of Nautical Medicine, Springer-Verlag (Heidelberg), pp. 163-172, 1984 (単著)
2. 異常時における人間行動、正田 巨他編、応用心理学講座3、事故予防の行動科学、福村出版、pp. 21-36, 1988 (単著)
3. 混乗船について、星野命編、異文化間関係学の現在、金子書房、pp. 72-82, 1992 (単著)
4. ノルウェーにおける独居高齢者への社会的支援の実態—夏季現地調査から—、産業・組織心理学研究、第13巻2号、pp. 79-94, 2001 (共著)
5. The strict agricultural standard and difficulty of agricultural work for aged workers, M. Kumashiro 編、Aging and Work, Taylor & Francis (London), pp. 193-203, 2002 (共著)

8. 2009年大会開催校からのご挨拶

次期大会委員長：川本 利恵子（九州大学）

先日、日本応用心理学会第75回大会が2008年9月14日・15日の2日間にわたり開催され、盛会のうちに終わりました。第75回大会の総会で紹介させていただきましたが、次回の第76回大会は平成21年9月12日（土）・13日（日）の2日間、九州大学で開催することになりました。

心理学会は九州大学の箱崎地区キャンパスでこれまで開催されておりますが、今回は大会委員長が九州大学大学院医学研究院に所属しているため病院地区キャンパスのラボ・ステーションI・IIで開催します。医学部、歯学部、薬学部と九州大学病院がありますこの病院地区キャンパスは、博多中洲に地下鉄で3駅（5分）、博多駅にJR鹿兒島線で1駅（2分）、福岡空港にはタクシーで10分という非常

に交通の便の良いロケーションなので、会場にアクセスしやすいと思います。

ところで、今回初めて医療教育機関で開催しますが、それだけではなく開催会場名がコラボであることも象徴的であると考え、大会の特色を心理と健康・医療・看護などがコラボする内容にしたいと考えました。これまでとは一味違った大会にしたいと企画しておりますので、皆様の多くのご参加をお願い申し上げます。

久しぶりに本州を離れた九州という地方での開催となりますが、少し足を延ばせば韓国がありますので、また別の楽しみもあるかと思えます。アジアの玄関口といわれております博多に是非お越しいただきますようご案内申し上げます。

9. 「応用心理士」認定審査委員会からのお知らせ

「応用心理士」認定審査委員長：浮谷 秀一（東京富士大学）

日本応用心理学会認定「応用心理士」認定審査委員会は、平成20年度前期分の資格認定審査を行った結果、以下の2名の方を認定しました。

266 大場 浩史 267 石丸 律子

20年度後期分の資格申請の受付期間は、10月1日から11月末日までですが、ニュースレターの発行日を考慮して12月末日まで延長いたします。資格要件を有していて、まだ資格申請をされていない会

員の方は、申請をお願いいたします。資格申請書類のご請求および資格申請手続きに関するお問い合わせは、ハガキかメールにて下記をお願いいたします。

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3-8-1

東京富士大学応用心理学研究室内

「応用心理士」事務局

E-mail: ukiya@fuji.email.ne.jp

10. 終身会員について

事務局長：浮谷 秀一（東京富士大学）

本学会には、終身会員という制度があります。終身会員になるためには、年度末までに申し出る必要があります。下記の日本応用心理学会会則の抜粋をご確認いただき、終身会員を希望される会員の方は事務局までお申し出ください。なお、会員在籍年数など不明な点がございましたら事務局までお問い合わせください。

(会員)

第 4 条 本会の会員は、正会員、名誉会員、終身会員、賛助会員、および学生会員とする。

(中略)

4 終身会員は、次のいずれか 1 つに該当し、本人の申し出により常任理事会の承認を得たものとする。

(1) 満 71 歳以上、かつ正会員在籍年数 30 年以上の正会員

(2) 満 71 歳以上、かつ認定「応用心理士」取得後 10 年以上経過した者

なお、終身会員は会費を納める義務を有しない。

(後略)

11. 役員選挙について

選挙管理委員長：浮谷 秀一（東京富士大学）

今年度末で現在の役員が任期を迎えます。それに伴い、役員選挙を実施いたします。第 67 回大会の 2 日目 9 月 15 日（日）に開催された常任理事会において、選挙管理委員会が組織されました。役員選出・選挙規程により、選挙管理委員長には浮谷秀一事務局長があたり、選挙管理委員として、荻野七重副理事長、鎌形みや子理事、高石光一理事、森脇保彦理事が指名され、承認されました。

今後の日程は、下記のとおりです。11 月上旬に選挙権のある会員の方に投票用紙をお送りいたします。ご投票をよろしく願います。

11 月 15 日（土） から 25 日（火）	会員による理事および監事の投票 (郵送)
12 月 14 日（日）	2008 年度第 5 回常任理事会（理事 および監事の最終決定）
2 月中旬	理事による常任理事の投票（郵送）
3 月上旬	選出された常任理事による理事長選 挙および副理事長の選出
3 月上旬	2008 年度第 6 回常任理事会におい て承認

12. 事務局だより

事務局長：浮谷 秀一（東京富士大学）

- 2008 年度第 75 回大会中に開催された総会において、下記のことが承認決定されました。
 - 2007 年度決算の承認
 - 2008 年度予算の承認
 - 名誉会員として、大橋信夫先生を推戴した。
 - 2010 年度第 77 回大会委員長は京都大学の田中真介先生に決定した。

- 2009 年度第 76 回大会（川本利恵子大会委員長）は、9 月 12 日（土）・13 日（日）に九州大学病院地区（JR 鹿児島本線「吉塚」、地下鉄「九大病院前」、県庁前）にて開催を予定していると報告があった。

下記に記載した会員の住所が不明で、郵便物が届かない状況です。これらの方の住所をご存知の方が

おりましたら、事務局までお知らせください。

[正会員]

雨宮一洋、伊藤朋子、岩本彩子、大内 隆、岡村千鶴、鑑さやか、加久 綾、片岡健二、熊倉朋子、河野雄二、小林桂子、齊藤早香枝、佐伯勝幸、佐久間直也、下方友子、薛常 慧、新藤美香、杉浦愛子、鈴木祐子、高田智子、高橋 晃、高見理恵子、武田繁好、武田真弓、竹中桂子、田辺 勝、月野木竜也、土谷 望、椿堂由紀、出水真寿美、富重健一、鳥山絵美、中里 茂、仲本美央、南篠充寿、楡木佳子、野村昌史、蓮見知恵子、服部隆志、藤生英行、布施晶子、古川ひとみ、松坂まり子、マルコンオットー、三村 覚、安川雅史、山崎麻里、吉田恒彦、劉 莉、若山英央、渡部桂子

[賛助会員]

社会環境研究所

また、住所、所属など変更がありましたら、書面にて速やかに事務局までお届けくださるようお願いいたします。

日本応用心理学会事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19

(株)国際文献印刷社内

Tel: 03-5389-6491 Fax: 03-3368-2822

E-mail: jaap-post@bunken.co.jp

お悔やみ

2008年8月に名誉会員の内海 滉先生がお亡くなりになりました。生前の本学会へのご貢献に感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

編集後記

夏の暑さも終わりを告げ、秋本番を迎えております。冷房も暖房も必要ないこの季節は、一年のうちで最も快適な季節です。会員の皆さまも研究やお仕事に集中できる良い季節であると思います。年2回発行のニュースレターは、例年春と秋のこうした時期に皆さまにお届けしております。

さて、今回は大変盛りだくさんの内容となりました。藤森立男先生を中心に運営された今年の大会を振り返っての記事、学会賞を受賞されたお二人の方からのメッセージ、12月に松本市で開催される公開シンポジウムのご案内、応用心理学関係の国際学会のアナウンスと今夏の米国ワシントン DCでの大会参加記、そして長年本学会に貢献され名誉会員に推戴された大橋信夫先生のご紹介と先生からのメッセージと続きます。

若き日の大橋先生が海上労働研究の開拓者である故西部徹一先生から賜ったとされる「研究者に必要なものは、『鈍』と『根』と『運』だ」というお話は大変含蓄があります。後進の我々は、大橋先生からこの言葉をご教示いただき、胸に留め置く必要があるように感じた次第です。超高齢時代を生きる我々にとって、研究を超えて人生を生きていく上でも大事な言葉であると私はとらえました。

また、今回は事務局からもたくさんのお知らせがあります。会員の皆さまには是非ともご確認いただきたく、お願いいたします。来年の大会は、九州大学が開催校となります。本学会大会の九州での開催は久しぶりであるため大変楽しみです。次号は、新緑の季節である5月頃の発行を予定しております。会員の皆さまのますますのご活躍をお祈りいたします。

(所 正文)

発行 広報委員会
委員長 所 正文
日本応用心理学会事務局
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19
(株)国際文献印刷社内
電話 03-5389-6491 FAX 03-3368-2822